

沖縄県宮古島市で全国肉用牛経営者会議が現地研究会ひらく

全国肉用牛経営者会議（佐古保会長＝岐阜県肉用牛経営者会議会長）は、2019 年 11 月 18 日～19 日、沖縄県農林水産部宮古農林水産振興センター、沖縄県農業会議、宮古島市、宮古島市農業委員会と合同で沖縄県宮古島市内で「2019 年度現地研究会」を開き、栃木、岐阜、広島、島根、鹿児島県等の組織・個人会員ら 20 人が参加した。18 日の市役所上野庁舎で開かれた室内研修では、宮古島市農林水産部畜産課の担当官から「宮古島市における肉用牛生産（和牛の繁殖経営）の取り組みについて」と題した説明を聞いた。19 日は視察研修として、11 月期肉用牛競り取引の状況、市内の肉用牛経営者・荷川取広明さん、同じく上地良順さんの牧場や牛舎、JA 宮古肥育センターを回り、相互に意見を交換した。

【室内研修】

室内研修で、佐古会長は主催者を代表して、「昨年末に T P P（環太平洋連携協定）が発効し、今年は E U（欧州連合）との E P A（経済連携協定）が発効した。牛肉は、関税の引き下げによる国内への影響が最も心配される。深刻になるのは税率の下げ幅が大きくなる 5 年後、10 年後だ。食肉輸入の増加は、国産の枝肉相場にも影響を及ぼし始めている。ここ数年、子牛価格が高値で推移し、良い経営はできている。しかし、将来的には後継者や担い手不足で危ぐせざるを得ない。日本の宝である和牛経営を引き継いでいくためにも、こうした研究会を通して情報交換し、各自が経営に活かしてほしい」とあいさつした。

宮古島市からは、宮古島市農林水産部の松原清光部長が「宮古島市は、サトウキビ、畜産、葉たばこ、果樹に取り組んでいる。昨年度の市内の肉用牛農家戸数は 730 戸、飼養頭数は 1 万 590 頭、平均飼養頭数は 14.5 頭、年間 4,368 頭が家畜競り市場で取引されている。来年 1 月に予定されている日米貿易協定の発効と、T P P と合わせると農林水産物の中でも牛肉の生産額は多くの影響（最大約 786 億円の生産額減少＝政府の影響試算から）を受けると言われているが、課題を克服すべく研究会で議論されることを期待している」と歓迎のあいさつをした。

続いて、宮古島市農林水産部畜産課畜産振興係・山城幸二郎係長から「宮古島市における肉用牛生産（和牛の繁殖経営）の取り組みについて」と題した説明を聞いた。

①宮古島市農林水産部畜産課畜産振興係・山城幸二郎係長

山城係長は配付した資料をもとに、「2018 年度畜産総生産額は 36 億 4,000 万円、うち子牛販売額が 31 億 1,650 万円と全体の 85.6%を占めている。近年、子牛の販売価格は高値で推移しており、県内でも石垣市に次ぐ生産地となっている。3 年前には、新たな食肉センターが稼働し、安定した食肉の供給体制が整っている。しかし、畜産農家の高齢化や離農による農家戸数と飼養頭数の減少が顕著に表れており、担い手の育成・確

保が急務となっている。この2年間で繁殖牛経営者は51戸が廃業し、飼養頭数10頭未満の農家が66%を占めている。また、近年は、海外からのクルーズ船の寄港が増加しており、家畜の悪性伝染病の侵入が懸念されている。ここは家畜伝染病予防法に基づく検疫強化の港・空港に指定されており、今後も、国や県と連携して防疫体制の強化を図る必要がある。肉用牛については、経営の安定化を図るため、繁殖率の向上、分娩時死亡事故及び子牛の死亡率の減少などの飼養管理技術の確立に努めるとともに、妊娠鑑定の徹底、予防注射の推奨、粗飼料の適期刈り取り、優良粗飼料の確保に向け、草地管理における機械化を進める必要がある」とした。

②参加者間での質疑応答

参加した会員とは、宮古和牛改良組合の行っている計画交配の遵守、増頭のための優良繁殖雌牛奨励事業、堆肥盤設置事業、優良繁殖牛の自家保留に対する支援、クラスター事業等について質疑応答が行われた。

③全国肉用牛経営者会議事務局からの報告

事務局からは、中央情勢の報告として、農林水産省生産局畜産部のまとめた「畜産・酪農をめぐる情勢」の抜粋、和牛遺伝資源の流通管理のあり方について（中間とりまとめ）検討会資料、宮城県における肉用牛系統不一致の問題について、消費税の軽減税率制度資料などについて提示し、理解を求めた。



←あいさつをする佐古保会長

1日目の室内研修→



【視察研修】

① J A おきなわ宮古家畜市場の 11 月期肉用牛競り取引

子牛 1 頭平均価格は 72 万 3,944 円と 3 か月ぶりに 70 万円台に持ち直した。平均キロ単価も 2,626 円の値が付いた。枝肉の値動きは鈍いものの、子牛相場は上げ傾向にある。11 月は子牛 298 頭の取引が成立。平均体重は 276 kg だった。1 頭平均価格は去勢が 75 万 5,386 円、雌は 66 万 3,526 円だった。1 頭の最高価格は雌の 165 万 6,600 円。最高価格の子牛は、黒毛和種の雌で系統は「安福久」。平均キロ単価は、去勢が 2,675 円、雌は 2,524 円となった。成牛を含む取引頭数は 355 頭。成牛、子牛を合わせた全体の販売額は 2 億 3,245 万円。

J A おきなわ宮古地区畜産振興センターの荷川取努センター長は「安福久が競りに出てくるのはあまりなく、希少価値的な面から高値が付いたのだろう。ここ数か月は価格が低迷傾向にあったが、今回の競り価格の上昇理由は出頭牛の品質の良さと、年末・年始をにらんだ肉用牛経営者や購入者の考え、被災地の畜産状況など、複合的な要因が考えられる」とし、今後の推移を見守りたいとしている。

会員らは、子牛の状態と競り値を細かにチェックし、取引の実態を吸収していた。

昨年度の取引情報＝年間出場頭数 4,422 頭、平均価格は雌 58 万 7,755 円、去勢 70 万 4,502 円、平均体重は雌 259 kg、去勢 270 kg。



←出場牛の競り取引

全国の参加会員→



②宮古和牛改良組合・荷川取広明組合長

繁殖経営。子牛用ハッチを用いた早期離乳と人工ほ育で、母牛のほ乳能力に左右されない子牛発育の斉一性と、母牛の早期発情による効率的な生産に取り組む。生産率は100%を達成している。ほ乳ミルク混合調製機を導入し、省力化にも積極的に取り組む。母牛の系統は「福栄」、「平茂勝」が中心。分娩間隔は367日で、1年1産を達成している。母牛から隔離した子牛は、タイヤ付きの専用のケージに入れ、移動させる。子牛は「福安照」、「北福波」が多い。沖縄県畜産共進会では過去に2度優秀賞を受賞する。母牛55頭、草地500a。粗飼料自給率は9割。草地には、生育の様式が違う4草種のギニアグラス（「ガットン」）、ジャイアントスターグラス、ローズグラス、パンゴラグラス（「トランスパーラー」）など干ばつに強い品種が播種されている。農業委員として、地域の畜産農家や新規就農者の指導、研修生らの受け入れも行う。

荷川取さんは「栄養の管理に気を付けている。太りすぎないようにし、必要な筋肉を付けるように運動をさせている。これからは若い人を引き込みながら、ともに入賞を目指したい。今後も、改良技術の向上に向け、自己研さんに努めたい」と話す。



←荷川取広明さん↓



自慢の和牛→



③農業生産法人 有限会社「大海」の上地良淳さん

それまでのサトウキビからピーマンなどの施設野菜に転換し、これとの複合経営に切り換えることで、土地生産性を高めるとともに、余剰地を草地化、肉用牛経営の規模拡大を実現している。肉用牛部門で法人経営を設立、補助事業を導入して牛舎や堆肥舎、機械などを整備した。さらに、家畜導入事業を活用して繁殖牛 20 頭を J A 貸付牛として導入し、繁殖牛 50 頭まで規模を拡大している。堆肥は、草地や個人経営のピーマン畑に利用。将来的には、繁殖雌牛 80 頭まで増頭する計画を持つ。青年農業士、指導農業士、かつて農業委員として地域の畜産農家や新規就農者の指導、研修生らの受け入れも行う。

同地域はコントラクターが多いことから、草地の管理を全ての工程を依頼したのでは時間や経費がかかることから、刈り取り、反転、集草までを自ら行い、牧草の適期刈り取りが可能となり、適切な草地管理により安定した粗飼料を生産できている。

早期離乳による繁殖成績の向上にもつながっている。母牛のコンディションが早く回復し、分娩後の発情が早まって平均分娩間隔は 12.2 か月とほぼ 1 年 1 産を達成。子牛の下痢などによる損耗が減った。子牛は生後 4 日目で母牛から離し、子牛用ケージ内で 60 日齢まで個々に人工ほ乳を行い、その後は他の子牛と一緒に牛舎内で管理している。

安定した高値取引の子牛販売も実現しているのも特徴だ。子牛去勢 42 万円台、同雌 39 万円台と宮古家畜市場平均価格よりも高値、県内家畜市場平均価格よりも高値で取引されている。地域のリーダーとして、研修会などには積極的に参加して、情報収集・意見交換をして経営改善に生かしている。

上地さんは「繁殖雌牛の増頭に伴い、草地面積が不足してくるので、近隣で借りられる遊休地などを積極的に利用して粗飼料生産基盤を拡大していきたい」と意欲を燃やす。



←上地良淳さんと牛舎



④ J A 宮古肥育センター

肥育している牛の1割が「北福波」の子だという。海からの潮風が吹き抜ける高台にある6棟ある牛舎では、300頭を超える牛がいる。北福波は、宮古島市で生まれた種雄牛。上質な肉を生産するためには、優れた肉質を持つ血統の母牛と父牛が必須である。繁殖は人工授精で行われ、優秀な種雄牛は大切に扱われる。北福波は、最上級のA5クラスの肉質の牛を数多く誕生させている。

「宮古牛とは、宮古地域で生産・育成された登記書と生産履歴証明書を持つ子牛を、宮古地域で15か月以上肥育した黒毛和種の去勢牛や雌牛のこと。去勢牛は生後25～35か月、雌牛は25～35か月で出荷される」と砂川弘信農場長。

宮古地域では、年間5,000頭以上の子牛が生まれるが、そのうち約8割は沖縄県外に、約800頭が沖縄本島に出荷されており、残る約200頭だけが宮古牛として肥育されているという。同市では、かつて子牛を生産する繁殖経営が主流だったが、近年は、この宮古牛を出荷する肥育経営に力を入れている。J A 宮古肥育センターでは、家畜市場から生後8～9か月の子牛を仕入れ、20～21か月ほど肥育し、年間160～200頭を出荷している。

J A 宮古肥育センターでは、牛にストレスをかけないように、数々の工夫をしている。牛舎の環境整備にも余念がない。牛舎内の風通しをよくするため、天井には扇風機を設置。床には、バガスというサトウキビの絞りかすを敷き詰め、適宜、新しいものと交換し、清潔な環境を保つ。黒糖の精糖工場から絞りかすのバガスを供給する一方、牛舎から排出される使用済みバガスは堆肥になる。



← J A 宮古肥育センター

